

# 琉球大学学術リポジトリ

## 第3章URGCC学習教育目標の達成状況

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 美都雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41266">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41266</a>

## 第3章 URGCC 学習教育目標の達成状況

山田美都雄 (URGCC 推進支援室研究員)

### 1. 本章の目的

本章では、本学の学生が、学士課程教育の目標として全学的に掲げられている「7つの URGCC 学習教育目標」それぞれについて、どの程度の達成水準に位置するのかに照準を当てた分析を行う。URGCC 学習教育目標の達成とは、すなわち、本学の学生にとっての「学習成果 (learning outcomes)」の達成を意味しており、それゆえ、これらの目標の達成水準を測定するということは、本学の学生の学習成果の水準を見定めることを意味する。本学が掲げる目標に学生が達していれば、ひとまず学生の質の保証がなされていると考えることができるし、逆に到達していなければ即座に対応を求められるべき課題となる。

### 2. 分析の方針

#### (1) 達成水準をどう設定するか

しかし、目標を掲げはしたものの、一体学生がどの程度の水準に達していれば、「本学の学生は目標を達成している」、あるいは「本学の学生はしっかりと学習成果を身につけている」と言えるのであろうか。

ここでは、試行的に各学習教育目標への到達状況を「得点率」として表し、それが60%の水準に達しているか否かという基準に着目して分析を行った。それでは一体なぜ60%なのか。その理由は甚だ単純なもので、学習教育目標の達成を、本学における「成績評価基準」になぞらえて用いたことによる、というものである<sup>a</sup>。ここで採用する方法は、あくまで学習成果の評価基準の一例にすぎないことを予め断っておく。この評価基準の採用の妥当性については未知であり、よりよい基準があれば随時更新される性格のものであるが、客観的にその基準を定めることは容易ではないため、現時点においては便宜的に「成績評価基準」の考え方を学習成果評価の場合にも準用することにした。

#### (2) 測定項目について

また、URGCC 学習教育目標で掲げられるような汎用的能力の測定を行う際、①それを測定するための項目の多様性（測定項目の選定の困難さ）や、②学生の主観やパーソナリティに依存した回答（測定された数値の客観性の欠如）といった問題に出くわす。「微分」や「積分」の知識の理解度を測定する場合であれば、ある程度「これ」として客観的な評価項目は定まるであろうが、殊に汎用的能力に関してそれは難しい。また、大学が異なれば教育理念も異なるので、それに応じて評価項目が変わる可能性は大いにある。

このような困難さから、URGCC 学習教育目標の測定項目に関しては、言ってみればある種の「妥協」が必要となってくる。すなわち、分析の結果として示された自律性の得点率を、「それは本当に真の自律性を測っているのか」とい疑う批判をひとまず控え、「この

---

<sup>a</sup> 本学では、「琉球大学各学部共通細則」において、授業における評点が6割に達しない学生は、不合格(F)になることが定められている。

ような項目で自律性を測定したら、このような得点率が示された」といった条件的な態度が求められてくるということである。このような前提を踏まえたうえで、ここでの分析結果を見ていただきたい。なお、学生調査はそもそも、学生「集団」という集合体の傾向性を見るうえで有益なものであって、「個人」の到達度を見るものとしては適さないということも併せて付言しておきたい。ここでは、あくまで集合体としての目標の達成状況を把握することを念頭に置いているのであり、各学生個人が実際に学習成果を身につけたか否かに関しては、別途各学士教育プログラム<sup>b</sup>において、測定されるべき事柄であると考えらる。

### (3) 使用する変数の説明

前述のように本分析では、各 URGCC 学習教育目標の測定に関し、「得点率」という考え方を採用している。「得点率」とは、各尺度の合計得点を 100 とし、学生がそのうちのどの程度の割合にまで到達を示したかを捉える数値（百分率）である。この概念を用いるのは、学生が各目標について全体の何%の到達度に位置するかが見えやすいからである。なお、各 URGCC 学習教育目標の得点率の変数については、表 3-1 にて説明している。

表 3-1 URGCC 学習教育目標の「得点率」変数の説明

変数名	算出法	項目内容
自律性得点率	4 項目を加算した合計 16 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学で学ぶ意義を理解することができる</li> <li>・目標達成のために、自律的に努力することができる</li> <li>・生涯を通して学び続けようという姿勢を持つことができる</li> <li>・心身の健康を自律的に維持するように努めることができる</li> </ul>
社会性得点率	5 項目を加算した合計 20 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会の規範やルールの意味を理解し、自己の良心に従って行動できる</li> <li>・他者の意見を傾聴することができる</li> <li>・他者と協調・協働して行動することができる</li> <li>・リーダーシップを有し、目標の実現のために行動することができる</li> <li>・社会の一員としての自覚を持つことができる</li> </ul>
地域・国際性得点率	5 項目を加算した合計 20 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分が生活している地域社会の問題を理解することができる</li> <li>・沖縄の自然・歴史・社会等と世界の状況を結びつけて理解することができる</li> <li>・異文化を理解し、寛容な姿勢を持つことができる</li> <li>・自然環境を理解し、自然と共生するための知識を身につけることができる</li> <li>・地域・国際社会の発展に積極的に関与することができる</li> </ul>
コミュニケーション・スキル得点率	5 項目を加算した合計 20 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高度な日本語力を持ち、活用することができる</li> <li>・特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる</li> <li>・語彙、論理ともに適切な文章で論文を作成することができる</li> <li>・自然や社会的現象について、シンボルを活用して分析・理解し、表現することができる</li> <li>・様々な立場を理解し、論理的に意見を交わすことができる</li> </ul>
情報リテラシー得点率	4 項目を加算した合計 16 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報通信技術を活用することができる</li> <li>・それぞれの分野において、信頼できる情報源を判断することができる</li> <li>・多様な情報を収集・分析して適正に判断することができる</li> <li>・収集した情報をモラルに則って活用することができる</li> </ul>
問題解決力得点率	5 項目を加算した合計 20 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な視座から物事を批判的に考察することができる</li> <li>・問題を見だし、創造的に解決策を考えることができる</li> <li>・情報や知識を論理的に分析することができる</li> <li>・獲得した知識や経験等を活用し、課題について総合的に判断することができる</li> <li>・幅広い学問分野について関心を持ち、その分野から得られる知見を活用することができる</li> </ul>
専門性得点率	1 項目合計 4 点中の得点率	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専攻する学問分野における思考法、スキル、知識等を体系的に身につけ、活用することができる</li> </ul>

<sup>b</sup> 本学における学士課程教育の質保証を行う基本単位の名称。平成 24 年度より正式に設置されている。

### 3. 分析

本項では、各 URGCC 学習教育目標の得点率の平均値（以下、「得点率平均」と称す）を比較した結果を、学生全体、男女別、学年別の順に示していく<sup>○</sup>。なお、以下の図中の括弧内の数値は度数を示している。

#### （1）学生全体

まずは、学生全体の URGCC 学習教育目標の到達状況について見ていこう。各 URGCC 学習教育目標の得点率平均を、図 4-1 に示している。達成水準を 6 割と考えると、いずれの目標においても、その基準に達している結果となった。

各目標についてみると、自律性、社会性の得点率平均は、7 割を大きく超え、それぞれ 74.66%、76.25%となっている。また、地域・国際性、情報リテラシー、問題解決力、専門性の得点率平均は 7 割弱であり、それぞれ、68.87%、69.46%、69.94%、68.27%となっている。7 つの学習教育目標の中で、得点率平均が最も低かったのが、コミュニケーション・スキルであり、62.46%であった。

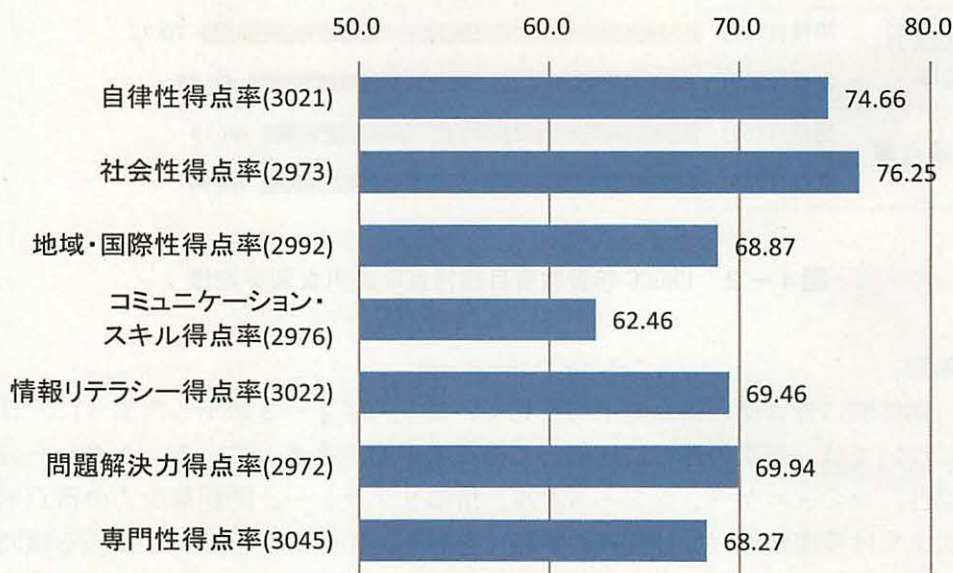


図 4-1 URGCC 学習教育目標得点率の学生全体平均値

#### （2）男女別

図 4-2 は、各 URGCC 学習教育目標の得点率平均について、男女別に見た結果である。これを見ると、自律性、社会性、地域・国際性については、女性の方が高く、問題解決力は男性の方が高い結果となっている。なお、コミュニケーション・スキル、情報リテラシ

<sup>○</sup> 専門性の得点率の変数に関して注意点を述べておきたい。専門性の得点率に関しては、表 3-1 に示したように、1 項目のみに基づいた得点率を表示しているため、他の目標に比べて精度が荒いものとなっている。これは、専門性に関しては、全部で 29 ある学士教育プログラムの専門性の多様さから、全学共通的に問うことが難しいためである。専門性のより精緻な評価に関しては、各学士教育プログラムの取組に委ねたい。

一、専門性に関して男女差はなかった。また、男女ともに、いずれの目標においても達成水準の6割をクリアしている。



図4-2 URGCC 学習教育目標得点率の男女別平均値

### (3) 学年別

最後に、学年別に各目標の得点率平均を見ていこう。図4-3に示したように、自律性と社会性については、年次の進行に比例して得点率平均が高まっている。しかし一方で、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力の得点率平均は、2年次までは停滞状態（伸び悩みの状態）を示し、3年次から上がり始める傾向にある。専門性については、3年次までは年次の進行に伴い高まるが、4年次において停滞を示している。

1項目のみの尺度を用いている専門性得点率を除いて考えると、自律性や社会性といった「態度・志向性」については、年次の進行につれて比例して上昇傾向にあるが、地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力といった、具体的な知識を操作し、駆使することが求められるような能力に関しては、2年次での停滞を経て、高学年の段階（3年次）から上昇傾向に移っている。

なお、達成水準を見てみると、やはりコミュニケーション・スキルの得点率平均で低い水準を示しているものの（特に1・2年次）、全体として60%の基準を超えている。



図4-3 URGCC 学習教育目標得点率の学年別平均値 (N=2766)

## 5. まとめ

ここまで、本学の学習成果としての位置づけにある、URGCC 学習教育目標の達成の状況について概観してきた。分析の結果、本学の学生の各目標の得点率平均は、すべての目標において6割の水準に到達していた。ただし、中でもコミュニケーション・スキルについては、最も低い水準にあり、6割を若干上回る程度であった。ゆえに、本学では特にコミュニケーション・スキルをいかにして着実に身につけさせていくかを優先的に考えていく必要が指摘される。

また、自律性、社会性、地域・国際性、問題解決力においては性差があり、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、専門性に関しては性差が見られないことが明らかと

なった。性別に応じて、このような差が見られるのは非常に興味深い。目標の達成に向けて、性差を考慮した教育が行われることで、功を奏す場面があるかもしれない。

さらに、学年別に得点率平均を見ても、各目標において差が見られることが分かった。とりわけ、具体的な知識を志向し、それら知識を駆使するような能力に該当する目標（地域・国際性、コミュニケーション・スキル、情報リテラシー、問題解決力）に関しては、2年次では順調な伸びが確認されず、3年次において上昇を始めることが分かった。このことは、年次と学習成果を単純な直線関係で結んで考えるのではなく、学習成果の種類に応じ、それに要する時間やそれが発現するタイミング（機会）が異なることがある、という柔軟な考え方をを用いていくことの必要性を示唆している。

このように、性別や学年といった変数と学習成果との2変数間の関係を見るだけでもいろいろな想像が膨らんでくる。今後、より多数の変数と学習成果との影響関係を視野に入れた分析を行い、琉球大学における学生が辿る、URGCC 学習教育目標（学習成果）の達成経験・達成経路（プロセス）を多様な角度から分析していくことが求められる。